天びん秤や計量カップなど　～多楽島出身の富山　清人さん～

富山清人さんは歯舞群島多楽島の蒲原磯で、お父さんの清次郎さん、お母さんのイトさん、弟さんとの四人暮らしで、根室にもお姉さん夫婦やお兄さん、二人の妹さんが暮らしていました。家業は漁業で主にコンブ採りやヨード、カリの製造や仲買をしており、春から年明けぐらいまでを島で過ごし、年明けから春まで根室で暮らしていました。

戦争の末期、アメリカの潜水艦が出没するということで沖に出る漁はできず、主に中国に輸出していたコンブの出荷もままならなくなったため、沿岸でできるアブラコ釣りをすることになったそうです。ところがアブラコ釣りの資材が不足していたことから、代表してお父さんと清人さんが資材調達のため根室に向かったのですが、そこで根室空襲に遭い、お父さんや根室に住んでいたお姉さんなどを亡くされました。根室は一面焼け野原となり、根室に居たお姉さんの子どもと妹たちを連れて島に帰りました。

終戦後、ソ連軍が侵攻してきて、集落の人々は次から次へと脱出していきました。清人さんも脱出を考えましたが、これからの生活のため、無一文で脱出するわけにはいかず、売り物となるヨード、カリを生産してからの脱出で、昭和二十年十二月に入ってからとのことでした。

天びん秤はヨードを作るためのマンガンを計る秤、硫酸を図るための計量カップ、その他に鞄やランプ、桶、犬の毛皮のチョッキなどの生活用品を持ち出しました。

秤などは、根室に持ってきても役に立たないことはわかっていましたが、それでも普段から大事に使っていた品々を置いていくことはできなかったとのことで島での暮らしを偲ぶとても大事なものだと大切にしてらっしゃいます。